

中国における日本サブカルチャーの受容に関する研究

— アニメ受容の史的展開 —

(博士論文全文の要約)

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期人文学専攻

学生番号 D113416

氏名 郭 閩華

現在、国外では日本が誇るソフトパワーの代表こそアニメーションであるとも言われており、日本のアニメが世界的に注目されている。例えばそれは、英語、仏語、西語などの欧米語圏において、日本製アニメのことを「anime」という日本語が由来の外来語で表現していることから伺える。この日本製アニメの世界進出の担い手となったのが、いわゆる「おたく」と呼ばれる人々である。この「おたく」という言葉には様々な意味や解釈が存在するが、本研究においては日本のサブカルチャー、特にその中でもアニメを愛好する若者と暫定的に限定して論じていく。彼らは「おたく文化」と呼ばれるいわゆるサブカルチャー的文化を形成し、日本に留まらず、世界へと発信している。以上のように、日本製アニメの世界進出における「おたく」の役割は極めて重要なものである。

日本製アニメが席卷する世界の潮流に同じく、中国においても日本製アニメは、インターネットの発展とともに伝播・浸透が加速され、若者たちの人気を集めている。そして、日本本国と同様に、いつからか「おたく」と呼ばれる人々が現れ、日本製アニメの普及に一役買っている。しかし、中国の場合、欧州や米国など他の世界各国とは異なる日本との関係を背景としている。まず、旧日本軍に侵略を受けた歴史があり、その傷跡は今でも根強く残っている。また、近年においても、尖閣諸島(中国語表記：魚釣島)の領有権を巡って対立している。このような背景から、中国人民の対日感情は良いとは言える状況ではない。では、中国における「おたく」は、そのような背景を持ちながらも、なぜ日本製アニメを愛好し、また、どのような思いを抱いているのであろうか。そして、中国での日本製アニメの発展における彼らが果たした役割とはどのようなものなのか。

先行研究を見る限り、中国において日本製アニメがどのように発展してきたのか、またその要因となる日本のサブカルチャーの魅力とはどのようなものなのかということを経体系的に整理したものは見当たらない。そこで本研究では、日本製アニメ文化がどのように中国に伝播したのかその史的展開を整理し、日本製アニメの受容過程と実態とその社会背景を描き出していくところから始める。次に、現代中国における日本製アニメの伝播と受容の立役者である、字幕をつけるファンたちに焦点を当て、彼らの属性や主な業務内容、さらに、彼らを突き動かす成員の意識を分析する。

以上より、本研究では、日本文化の中でも、特に、アニメに焦点を当て、受容・伝播の過程を歴史的に描き出す。その際、テレビ局が主導して受容・伝播していた 00 年代までは、その過程を歴史的に整理し、それ以降のインターネットユーザーが主導した 00 年代以降に関しては、社会的調査を用いて、社会史的に描いていく。この 2 つ手法を併用し、世界に発信する日本製アニメ文化を学際的・国際的視点から相対化しつつ多角的に考究するにあたって、思想文化・歴史文化などの領域に重点を置いて全体像を捉えていく。中国における日本製アニメの伝播・受容のプロセスの史的解明を通して、地域を越えた日本アニメ文化の将来的可能性に関して考察することを目的としている。

本論文は序章を含む 7 章で構成される。具体的な内容は以下の通りである。

序章では、まず日本製アニメの中国進出と席卷の現状を取り上げ、研究動機や中国における日本製アニメの地位を問題所在として提出した。また、日本製アニメが日本での研究遅れや注目足りないと中国政府のアニメに関する政策を問題の背景として論じた。次に、アニメ研究を新たな「学」とするこ

とで、理論研究の方にも様々な可能性がうまれる。構築主義、コミュニケーション・メディア理論、カルチュラル・スタディーズ、ファンの理論など多様な側面からアニメ受容に関する理論を論じることを試みた。最後に研究目的を述べた。

第 1 章では、中国テレビにおける日本製アニメの受け入れ過程を歴史的に整理していく。先行研究によると、日本製アニメ文化が中国に伝播していく過程を 3 つの段階とされる。しかし、具体的な各段階のデータが明示されておらず、具体化していく必要がある。本研究では、80 年代以降の番組新聞など資料を調べ、中国上海地域におけるテレビ局の発展、上海テレビ局と日本の関係を述べ、さらに放送データを調べ、上海地域で放送された日本製アニメを 4 つの段階を整理し、北京・福建・上海地域の日本製アニメの放送比較しながら、日本製アニメの受け入れ歴史状況を明らかにした。

第 2 章では、中国のインターネットにおける日本アニメの配信状況を調査した。中国におけるインターネット映像配信が 6 つの種類に分類され、その中、日本製アニメを配信するとしては、動画共有系「土豆」「優酷」と代表する、P2P ストリーミング系が「PPS」を代表するという 2 つの配信状況に紹介した。ここで特に日本製アニメファンがよく利用している P2P 系サイト「極影サイト」を紹介した。新作日本製アニメのダウンロード数を統計していた。

第 3 章では、日本製アニメの翻訳を競争激しいファンサブ（字幕を付けているファングループ）の正体を調査した。第 1 節ではファンサブの歴史、第 2 節ファンサブの仕事手順、第 3 節中国における日本製アニメファンサブの

実態、第 4 節 ファンサブに関する法律問題、第 5 節 ファンサブに関する論説を展開で論じた。

第 4 章では、ファンサブに関するアンケート調査を実施し、分析した。本調査は主に 8 個 ファンサブグループの支持を得て、179 名 ファンサブ成員の協力をもらった。アンケート調査を通して、ファンサブ成員の属性、ファンサブで果たす活動に関する基本概況、活動と日常生活の関係、日本製アニメに関する意識を把握した。主なファンサブ成員は大学在学中ファンサブを加入、現役大学生を中心とする活躍していることが明らかにされた。成員は中国各地に分散しているが、東部沿海経済発達地域に集中している。さらに、海外、特に日本に相当なファンサブ成員が存在していることを明白にした。日本製アニメの影響で成員が来日しているとの関係の解明が、日本製アニメの影響力のひとつだと予想している。

また、ファンサブ活動している成員はほぼ全員「無償」で活動参加していることがわかった。「ファンサブの仕事は金銭ではかることができない」「心霊報酬（精神的報酬）」などの自由記述があったことから、自己のボランティア精神を強くアピールしている様子が見て取れた。さらに、成員がファンサブでの活動時間にさほど拘束されていないことがわかった。ほぼ半数の成員が「任務がある時やる、毎週の時間未定」を選択した。しかし、一旦任務がある場合には、つまり、新作アニメを翻訳する時、週一回 5 時間ぐらいかかることが

わかった。核心成員「所属の担当者」などは週 15 時間以上活動にかかっていることが明らかになった。

ファンサブは基本新作深夜アニメを翻訳しているので、早く字幕をつくるために、深夜作業が必要である。成員がファンサブ活動と現実生活学習とちがうでも、時間との調整することを選んだことは活動に参加する強い意欲を表しているとして理解してよい。どんなに困難な場合でも、ファンサブから離れたくない強い意識を表明しているが、現実にはファンサブ活動は 2 年以内を中心としているメンバーが多いことから、回答内容に乖離が見受けられる。

第 5 章では、ファンサブに関するインタビュー質的調査を実施した。ファンサブ成員は具体的にどのように日本製アニメを愛好するだけにとどまらず、ファンサブ活動に加わるプロセスやファンサブ活動を継続している具体的な状況を究明することをグラウンデッド・セオリー・アプローチ (GTA) を用いて分析し、23 人のファンサブ成員をインタビュー実施・分析した。

GTA の手続きによって導かれたの概念やサブカテゴリーを整理し、共通するものをまとめ、カテゴリーへと統合した。構成されたカテゴリーは、「馴染んでいる日本製アニメの存在」「日本製アニメへの愛」「日本語学習への強い意欲」「成員間の信頼友人関係を構築」「満足により習慣化された認識」「ボランティアの気持ちで活動に参加」である。

これらカテゴリー間の理論的關係性からコアカテゴリー、理論仮説を生成した。コアカテゴリー：ボランティア精神

で自己アイデンティティの実現に努める

理論仮説： 成員は子どもの頃から【日本製アニメに馴染んでいる】、アニメキャラクターの仲間同士の絆など作品内容への共鳴で心を揺るがされ、癒され、主人公との代入感でアニメが好き・熱愛から愛まで昇華している【日本製アニメへの愛】が生じている。日本製アニメを十分理解するために日本語を学習し、高い日本語能力を身に付けた、ファンサブ活動を通して日本語能力のアップ・維持を望んでいるという【日本語学習の強い意欲】、さらにはファンサブ活動を通して【成員間の信頼と友人関係を構築】【満足により習慣化されたという認識】で活動を続けることができている。活動が日本語の学習、アニメの交流、営利目的ではない、文化伝播ができるなどの理由で著作権に違反していないボランティア行為として正当化する一方で、外来の圧力を自己への弁護で防御しようとしている。

終章では、日本製アニメ受容の展開、ファンサブ活動の役割で日本製アニメの伝播・受容プロセスを述べる。そして、その結果を踏まえた上で、アニメという事例を通じた日本サブカルチャーや日本文化についての捉え直しを行なっていきたいと考える。

本研究ではサブカルチャーを代表する日本製アニメを事例として、中国における伝播・受容過程を考察してきた。これらを通して、以下の点を明らかにした。

第 1 に、日本製アニメが中国で放送された黎明期から現代にかけての史的展開を明らかにした点である。中国における 1980 年代のテレビ時代から 2000 年代のインターネット時代までの放送リストの整理によって、ここ 30 年間は日本製アニメの一部輸入から大量放送、後に封鎖していく過程であった。そして、このような中国固有の社会背景・環境の中で、ファンサブが形成されていった。

第 2 に、ファンサブに携わる人々の実態や意識を明らかにすることにより、文化の受容と伝播のメカニズムを解明した点である。量的調査によって、「属性」・「仕事の概要」・「日常生活における位置づけ」・「日本製アニメに関する意識」に関する傾向を明らかにした。質的調査によって、「ボランティア精神で自己アイデンティティの実現に努めている」ということが基盤となって、メンバーたちがファンサブ活動を行っていることが浮上した。さらに、ファンサブ活動が日本製アニメ文化を世界に伝播、浸透に役割しながら、活動の違法性が払拭できず、生存の環境が悪化し、存続危機に陥りつつあることも調査を通じて垣間見られた。

今後は、他の事例を使って、今回の成果と比較考察することにより、共通点によって論を補完し、相違点によって論を修正・拡大していくことによって、「日本文化の伝播と受容」に関する理論の精緻化を図っていきたい。

